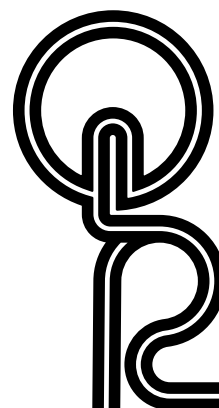


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 9 No.5, 2002



長野県深見池における野外講習会でのピストンコアリング。マッカラス空気圧入式サンプラーが水中から飛び出したところ。(木戸芳樹撮影)

Vol. 9 No. 5

October 1, 2002

2001年日本第四紀学会論文賞・・・2	研究集会・助成案内・・・14
シンポジウム報告・・・3	評議会議事録・・・16
巡検参加報告・・・4	会計関連資料・・・19
野外講習会参加報告・・・7	2002年度総会議事録・・・21
研究委員会報告・・・9	幹事会議事録・・・22
元会長 井関弘太郎先生追悼・・・12	会員消息・・・23
公募案内・・・13	

2002 年日本第四紀学会論文賞

日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考委員会(大場忠道委員長,遠藤邦彦,齋藤文紀,松浦秀治,吉川周作各委員)は,第四紀研究第39巻,第40巻の論文を対象に,独創性,論理性,発展性,学際性について慎重に審議した結果,次の2論文を授賞候補に選定し,これらの論文に決定いたしました。授賞理由と受賞者の抱負をここに掲載し,益々の研究の発展を期待いたします。

佐藤慎一・東 幹夫・近藤 寛・西ノ首英之「有明海諫早湾干拓地の貝類相 調整池における貝類相の時間的变化」. 第四紀研究, 第40巻2号, 85-95頁, (2001).

受賞理由

本研究は,1997年4月に潮止めされた有明海諫早湾において,その潮止め前後に貝類群集の調査を行い,人為的に引き起こされた急激な環境変化に対して生物相がどのように応答したかを明らかにし,地質時代の環境変化の解釈に有効な基礎的データを提供している。先に内湾泥干潟における生物分布を明らかにし(40巻,1号,43-51ページ),本研究において,貝類相が急激な環境変化にどのように変化してきたかを,綿密な現地調査により得た時系列の豊富な資料にもとづき,塩分変化などの他の環境制限因子と合わせて解析している。

過去への適用という第四紀学の視点から現在の現象を捉えていること,人為的に引き起こされた比較的大規模な自然環境の変化を題材にした着想,詳細かつ豊富なデータを基に解析していることなど本研究は高く評価できる。更に,人間活動によって生じている現在の環境変動に対して,現象を詳細に明らかにしてゆくことは,環境保全や環境修復などの視点からも重要である。過去への適用としての意義に加えて,現在生じている問題への第四紀学からの積極的な取り組みということでも本研究は高く評価できる。

< 受賞者の言葉 >



佐藤慎一(東北大学総合学術博物館)

このたびは,第四紀学会論文賞を賜りまして,誠にありがとうございました。ご選考いただきました委員の皆さま方に,厚く御礼申し上げます。また,授賞式に出席することができず,皆さま方に多大なご迷惑をおかけしましたことを,心からお詫び申し上げます。

私たちは,1997年4月に行なわれた諫早湾の潮止めをきっかけとして,様々な分野の研究者が集まり干拓調整池における共同調査を始めました。現場の深刻な状況とは裏腹に,調査は常に和気あいあいとしたムードの中で行なわれ,大変に楽しいものでした。また,様々な分野の研究者と交わることで,私にとっては数多くの新しい発見がありました。その中であって,私自身は諫早湾潮止めに伴う貝類群集の種構成の変化を調べています。受賞いただいた論文は,こうした共同研究の成果の一部を,過去



日本第四紀学会総会において2002年度論文賞を授与する熊井久雄会長と受賞者(井上 弦会員)

の海退期における内湾の閉塞に伴う化石貝類群集の変化と比較することによってまとめました。

この共同研究は、潮止めから5年が過ぎた現在でも続けられており、私たちはいつの日か諫早湾干拓地内に再び恒常的に海水が戻り、泥干潟に特有な底生生物群集が回復するまでの様子を観察することを夢見ております。そして、その暁には、ここでの観察結果を今度は過去の海進期における潟湖への海水の侵入に伴う化石貝類群集の変遷と比較したいと考えています。

最後になりましたが、私たちの共同研究を支援していただいた方々、また本論文を最後まで親身になって御指導いただきました、査読者・編集委員・編集書記の皆さま方に心より感謝いたします。

井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷 植物珪酸体による植生変遷との対応」．第四紀研究，40巻4号，307-318頁，(2001)．

受賞理由

本研究は、南九州の都城盆地に分布する累積性黒ボク土断面の連続(69)試料について、有機炭素・窒素量、C/N比、炭素・窒素同位体比を測定し、以前と同じ露頭で行った植物珪酸体による植生解析の結果と比較して、最終氷期最寒期最寒期(約24.5ka)以降の植生変遷を考察したものである。土壌試料の植物珪酸体と炭素同位体比という全く異なる手法でC3植物とC4植物の寄与率をそれぞれ求め、その結果が相互に類似した変化を示すことから、両手法が過去の植生解析に有効であること示した。また、植物珪酸体分析から算出したイネ科の各植物体(メダケ属、ススキ属、クマザサ属、ヨシ属)の生産量と土壌の炭素同位体比から算出したC3およびC4植物起源炭素量との間に、それぞれの植物体ごとに相関があることを見出し、各時代の主要な植生構成種の変遷を炭素同位体比からも考察した。さらに、アカホヤ火山灰降下によって壊滅的な打撃を受けた植生が回復する時、最初にススキ属のC4植物が進入し、その後メダケ節やネザサ節を主体とするC3植物に取って替わられたという植生変遷も明らかにした。その上、土壌の窒素同位体比は、過去の気候変化とくに乾湿変動(窒素同位体比は、多雨で小さく小雨で大きい)によって変化する可能性が指摘された。このことは今後、花粉分析と土壌の窒素同位体比との関連を詳しく調べてゆく必要性が示唆された。これまで同様な研究がほとんど行われてこなかったことから、第四紀の植生復元には植物珪酸体や花粉分析ばかりでなく、土壌有機物の炭素・窒素同位体比も有効であることを示した意義は大きい。

< 受賞者の言葉 >



井上 弦 (宮崎大学農学部)

このたびは我々の論文に第四紀学会論文賞を授与していただき、大変光栄に思っております。これまで、本当に多くの方々を支えて頂いて、このような賞に結びついたのだと考えています。本論文のきっかけを作っていただきました元九州農業試験場吉田溍博士 様々なお世話をいただきました学会関係者の皆様には大変感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本論文は、南九州都城盆地における累積性黒ボク土の土壌生成過程を明らかにする目的で行った研究の一部を基にしたものです。都城盆地は霧島火山群や桜島火山の近郊に位置することから、過去数万年に遡る数多くのテフラが堆積しています。そして、近年、南九州では精力的な研究者の成果によって、ほとんどのテフラの層序と年代値が明らかにされています。このような時間軸が明らかな断面において行った本研究によって、炭素安定同位体自然存在比(^{13}C 値)から算出したC₃植物とC₄植物の比率が、植物珪酸体から同じく算出した比率と一致することがわかりました。このことは、植物珪酸体分析の精度が高いことを証明しただけでなく、植物珪酸体が見出せない土壌においても、 ^{13}C 値からある程度の植生変遷を明らかにできることを証明したと思います。今後、この ^{13}C 値を用いた手法が益々、植生変遷解明に利用されれば嬉しく思います。また、本論文では、窒素安定同位体自然存在比(^{15}N 値)と窒素含量の関係については、詳述していませんが、 ^{15}N 値の推移はピーク位置がずれるものの、窒素含量と類似した推移を示しています。この違いについても興味深い結果であると考えています。このように、 ^{15}N 値一つをとっても、まだ未解明の部分を残しており、今後、解決していきたいと思っております。

現在、研究を進めるには厳しい状況にありますが、第四紀学に関わる土壌の研究についての興味は尽きません。今後、それらを少しでも解決できるよう研究をすすめ、日本に止まらず世界へとその成果を発信したいと考えています。また、多くの分野の方々に、このような研究に興味をもっていただき、よりよい共同研究を展開できればと思います。今後とも、皆様のご支援、ご指導をお願い申し上げます。本当にありがとうございました。

2002年日本第四紀学会大会シンポジウム報告

公文富士夫（信州大・理）

シンポジウム「日本アルプスの形成と自然環境の変遷」が信州大学山岳科学総合研究所の共催を得て、2002年8月25日に午前9:20から午後5:30にかけて、信州大学理学部C棟大会議室で開催された。参加者は120名ほどであった。

その趣旨は、日本アルプスはいつからどの様に隆起したのか、第四紀後半の気候変動は中部山岳地域の自然環境にどのようなインパクトを与えたのか、といった課題を、山地の隆起と盆地の沈降、化石（花粉）や湖沼堆積物・地形などからみた気候変動、それらに時間軸を与えるテフラ層序、といったデータを持ち寄って検討し、極東アジアにおける代表的事例として、山岳地形成とその環境変遷の解明に迫ることである。世話人には、公文富士夫、三宅康幸、赤羽貞幸、鈴木毅彦、および堤 隆があたった。講演題目は次のとおり。

- S-1 飛騨山脈における二段階の隆起過程 - 第四紀初頭の曲隆と更新世中期以降の傾動隆起 - 原山 智（信州大・理）
- S-2 テフラ研究からみた中部山岳周辺域の中・後期更新世編年の諸問題について 鈴木毅彦（東京都立大・理）
- S-3 飛騨山脈の隆起と火成活動の時空的関連 - マグマの定置と熱による山脈の形成 - 及川輝樹（信州大・院・工学系研究科）
- S-4 中期更新世の八ヶ岳火山活動史 内山 高（山梨県環境科学研究所）・八ヶ岳団体研究グループ
- S-5 更新世以降の日本列島の気候変動のトリガーはなにか？ - チベット高原と Warm Water Pool の役割 - 福澤仁之（東京都立大・理）
- S-6 最終氷期以降の日本アルプスの地形形成環境 - 氷河・周氷河・重力地形について - 岩田修二（東京都立大・理）
- S-7 野尻湖底ボーリング試料の有機炭素・窒素量と花粉組成の変動から見た最終氷期後半から完新世にかけての気候変動 公文富士夫（信州大・理）・河合小百合・井内美郎（愛媛大・沿岸環境科学センター）
- S-8 中部高地における後期更新世以降の人類活動 中村由克（野尻湖ナウマンゾウ博物館）
- S-9 最終氷期最寒冷期の人類社会と環境適応 堤 隆（御代田町教育委員会）
- S-10 内陸盆地における最終氷期以降の碎屑物と気候変動 赤羽貞幸（信州大・教育）

これらの講演と討論を通じていくつかの問題が鮮明になった。ひとつには日本アルプスの隆起の原因とタイミングである。大規模な火成活動とともに広域的な隆起が200万年前前後に発生したこと、および40万年前付近にもマグマ活動に関連した隆起があったと考えられることで、後者には傾動運動が伴われることが指摘された。また、指標火山灰が時間面の設定にきわめて有効であるが、火山活動の活発な中部山岳地域の中・後期更新世の指標火山灰の層位と年代値についての現状がまとめられ、特に中期の解明の重要性が指摘された。また、個別的な火山活動の復元が山岳環境の解明とともに、局地的な層序の解明に重要であることが八ヶ岳火山の例で示された。

第四紀は気候変動の激しい時代である。その変動の原因の一つがヒマラヤやアルプスの隆起であり、また、それと関連した大気・海洋循環であること、および海洋循環と関連してフィリピン東方に生じる warm water pool の重要性が指摘された。また、東アジア・太平洋地域で気候変動が先行する可能性の指摘があり、実際に野尻湖堆積物から明らかにした晩氷期の寒暖変動は、北欧やグリーンランド氷床で明らかにされたよりも2,3千年古くなる可能性が主張された。高く隆起した山岳地においては重力作用が周氷河作用とともに重要な地形形成の要素であることが豊富な実例で示された。寒暖変動や氷河作用の消長は、地域差があることが徐々に認識されるようになっており、日本の場合には火山灰層が時間指標となることの利点を活かした独自の編年を行うことが重要と考えられる。

旧石器人は地形や風土を巧みに利用した、かなり高度な社会をつくっていたことが中部高地の遺跡群の解析から示された。その文化の変遷は気候や環境の変化と密接に結びついていた可能性が指摘された。そのような変遷と最終氷期の様々なオーダーの寒暖変動や火山活動などとの関連を詰めていくことが一層重要になると考えられる。

シンポジウム全体としては必ずしも十分に相互関係が煮詰められていたとは言えないが、中・後期更新世の日本列島の姿を明らかにする上で、中部山岳地域のもつ重要性和今後の可能性が明らかになった点は大きな成果と考えられる。

2002年 日本第四紀学会大会巡検「上高地の自然環境と焼岳の火山地質」
参加報告

小森次郎（東京都立大学大学院理学研究科 大学院生）

信州大学での研究発表会等に引き続いて8月26・27日に、野外巡検が長野県の上高地周辺を対象として行われた。北アルプス南部に位置するこの地域では、広域のテクトニクスや火成活動、雪氷や河川や植生の作用、および人為的改変が複雑に作用して現在の環境が形成されている。今回の巡検のテーマは、地形地質、火山、植生、氷河・周氷河、砂防工学などの多様な観点から、これらの影響を理解することであった。また、巡検案内者の三宅康幸氏・及川輝樹氏(信州大学)、岩田修二氏(都立大学)を含めた11名の巡検参加メンバーの専門分野も、温泉、火山、活断層、古環境、植生、変成岩など多様であった。そのために、現地での議論もおおずとバリエーションに富んだ内容となった。以下に巡検コースに沿って各地点の概要を述べる。

【中ノ湯 1995年水蒸気爆発現場】：道路付け替え工事中に梓川の右岸で発生した水蒸気爆発の跡と、その後の対策工を見学した。表層数mを掘削中に地下約80mの範囲を含む水蒸気爆発が段階的に発生したこと、2回目のイベントとして斜面上方からの崩壊物が吹き上げられたことなど、意外に複雑で規模の大きい現象であったことを知った。交通量の多い国道のすぐ脇にこのような地熱地帯があることを知り、何となく足の裏に居心地の悪さを感じた。

【上高地河童橋】：上高地に着くとほぼ快晴でくっきりと焼岳や穂高連峰を望むことができた。北アルプスの主峰奥穂高岳の直下から上高地側に続く岳沢には、最終氷期に氷河が存在したとされている。しかし、実際に眺めたその谷に氷河地形がはっきり認められないことが意外であったので、上高地ビジターセンターの鳥瞰図にあった涸沢と比較してみた。側壁の傾斜が岳沢の方が明らかに急であり、碎屑物の崩積が涸沢よりも激しく、案内者の

説明のように氷河特有の地形が埋められたことが想像できた。

【梓川左岸(河童橋～古池)】：柱状節理の発達した穂高安山岩類の溶結凝灰岩、淡灰色のマサを供給する奥又白花崗岩、および美濃帯の頁岩へと順次地質が移り変わる登山道を、植生や水質の説明などを受けながら上流へと進む。斜面からもたらされた岩屑は崖錐や扇状地を形成しており、特に六百沢、下白沢などでは1ヶ月前に発生した土石流によるできた扇状地を見ることができた。それらには流水によって浸食された段丘状の地形や自然堤防が認められ、残された立木には高さ2m付近まで土石流の飛沫の付着が認められた。ここでは、厚さ数十cmの土石流～泥流堆積物が、カラマツやカンバの林床を埋積している状況が特に印象的であった。

【梓川右岸(明神橋上流すぐ)】：この付近の梓川は谷底平野を形成し網状河川の特徴を示す。その広い河原の中に見られるケショウヤナギなどの河辺林の説明があった。河辺林は洪水や砂礫の供給があるため生きながらえているそうである。このような自然状態で調節されたシステムがある中で、観光の中心である河童橋周辺の河床が高くなることを防止するために、周辺では砂礫の浚渫や帯工という堤体をつくる工事が行われている。しかし、これによってケ



巡検参加者一同（浜田撮影）



「梓川左岸下白沢(河童橋から上流2.5km) .7月に発生した土石流の堆積物(厚さ約30cm)を排除して写真左下から右下に登山道がはしる。奥の山稜は前穂高岳の前衛の明神岳」(小森撮影)

ショウヤナギなどが排除されることもあるそうで、人為的な河川管理による梓川周辺への負の影響が懸念された。

【中尾火砕流堆積物】: 峠沢の扇頂部に位置する砂防ダム(スクリーン式)での土砂排除現場から出発。途中で滝谷花崗閃緑岩が露出する沢を横断して中尾峠への登山道を上る。標高1650m付近からは深く切れ込んだ峠沢の谷壁が見られるようになる。これらは約2300年前の噴火による中尾火砕流堆積物で構成され、露頭の連続性も良く明瞭なフローユニットが数枚認められた。残念ながら直接露頭に取り付くことはできなかったが、上方にそびえる溶岩ドームとをセットにして眺めると、さながら雲仙普賢岳の東麓に立った錯覚に陥る。標高1850m付近より上部には堆積物中に1mを越すような巨礫は含まれないようで、地形も考慮するとこの高度より上は主に火砕流の流走域に相当するのかもしれない。

【焼岳の水蒸気爆発堆積物】: 最近約1600年間に発生した焼岳火山の水蒸気爆発の堆積物を登山道わきにて観察。多くの年代データによって裏付けられたこれらの噴火活動の編年には説得力があり感心させられた。給源から1km以上離れたこの位置でも意外に堆積物の粒径が粗いことに驚いた。1962年での水蒸気爆発の堆積物

は、給源近傍以外では堆積物として認められないそうである。したがって、それ以前の堆積物(Ykd-Tu1 ~ Tu8)をもたらした噴火のスケールはかなり大きかったことが伺われる。

【1962年割れ目火口】: 通称“展望台”でのさわやかな昼食後、構造土の見られる稜線を通して、溶岩ドームの北東側に位置する割れ目火口と噴気孔に近づく。硫黄が晶出している噴気孔に案内者持参の温度計を挿入したところ93を示した。この割れ目火口はそのまま峠沢につながるガリーとなっており、また中尾火砕流の堆積原面を下刻する下堀沢などの沢も、それぞれ過去の水蒸気爆発の噴出口につながっている。水蒸気爆発に伴った泥流の発生が、これらの沢の形成のきっかけになったのでは、という説明がとても印象的であった。

百名山である焼岳山頂まであと一步だったことから、溶岩ドームに後ろ髪を引かれながら下山を開始し、約1時間で全員無事に登山口まで戻った。全体に徒歩による移動と登山ということで、巡検メンバーの多くが体力的に不安を感じたが、特に故障者もなくシンポジウムで熱い議論がかわされた現場を直接見ることができ、参加者全員がおおいに満足した二日間であった。末筆ながら巡検案内者の皆様にあらためて御礼申し上げます。

2002年 日本第四紀学会大会巡検「八ヶ岳の第四系 更新世の火山活動および遺跡」報告

内山 高(山梨県環境科学研究所)

2002年8月の第四紀学会大会にあわせて、8月26日に標記の巡検を行った。巡検コースは八ヶ岳火山北部を西から東に横断し(国道299号)、東麓にいたるコースで中期・後期更新世の火山活動によるテフラ等と後期更新世の旧石器遺跡を巡検した。参加者は中学生を入れて5名で、案内者および信州大学の院生・学生を含

めると総勢14名となった。

地点1(麦草峠東)では黒曜岩がみられる(写真1)。この黒曜岩は従来後期更新世とされていたが、最近のK-Ar年代測定により0.26Ma、中期更新世の活動を示すとされ、層序の見直しがされている。また、ここは麦草峠周辺の遺跡で産出する石器の石材の原産地の一つとされて



写真1 麦草峠東地点にて(内山撮影)



写真2 八ヶ岳起源テフラの観察(内山撮影)

いる箇所である。

地点2(池の平遺跡群駒出池遺跡と八ヶ岳起源テフラ)では、旧石器遺跡の駒出池遺跡と八ヶ岳起源のテフラがみられる。駒出池遺跡は後期更新世末、八ヶ岳の高地に立地した旧石器遺跡群の一つであり、この石器は地点1の黒曜岩を原産としている。遺跡のすぐ近くの露頭でフィールドネーム「デカパミ」(Yt - Pm4)と池の平火山灰(AT)を観察した(写真2)。

地点3(川上村居倉)では、中期更新世後半の八ヶ岳起源のテフラ群と広域火山灰の露頭である。ここでは八ヶ岳起源の黒曜岩片を含む軽石層とローム層およびそれらに挟在する広域火山灰であるガラス質細粒火山灰層を観察した。

最後はJR小海線野辺山駅にて、巡検参加者に参加証をお渡しして解散となった。

第8回日本第四紀学会(野外)講習会

「湖沼年縞堆積物の採取および試料採取方法」参加報告

堀 和明(日本学術振興会)

2002年8月22日、信州大学での第四紀学会に先立ち、長野県阿南町の深見池で上(野外)講習会が開かれた。近年、氷床や海底、湖沼などで掘削されたコア堆積物を用いた古環境復元の研究が世界各地で進められ、興味深い結果が高精度で続々と報告されている。しかし、データの質を左右するコア採取の現場を知る人は意外に少ないのではなかろうか。

講習会では、湖沼でのコアリング経験が豊富な福澤氏をはじめとする都立大環境変遷学研究室の方々6名、公文氏(信州大:当日は第四紀学会準備のため学部生の大友氏が参加)、深見池の調査を長年続けてこられた下平氏(飯田市)が講師を務め、講習会の準備から後片づけまでを円滑に進めてくださった。参加者は延べ32名で、その多くは講習会前日に阿南町少年自然の家に入り、夜はキャンプ場でバーベキューをして懇親を深めた。その後、食堂で下平氏による深見池の紹介、都立大の川上、松尾両氏による第四紀学会での発表リハーサルも兼ねた、深見池の年縞堆積物を用いた古環境復元に関する研究発表があった。

深見池のある阿南町は飯田市から約20km南に位置し、町の北側にはタレント峰竜太の故郷下條村がある。配布資料によれば、深見池は周囲670m、湖水準標高484m、平均水深5.0m、最大水深9.3mで、集水域が非常に狭く流入河川のない山間の湖である。この池は京畿大地震(1662年)の際に地滑りによって生じた窪地に水が貯まってできたといわれている。湖底堆積物には「年縞」が発達するが、その原因として、風の影響が小さいため湖水の垂直混合が生じにくく、とくに夏期は底層水が無酸素状態になり、底生生物による堆積物の擾乱が少ない、流入河川がないため堆積物の多くは湖内で生産された生物遺骸であり、さらに湖内の生物相が季節により変化する、ことが挙げられている。

当日は晴天に恵まれ、はじめに福澤氏からコア採取方法の解説があり、続いてセディメント

トラップの引き上げと観察、都立大のマッカーラス(Mackereth)サンプラーおよび信州大の重力柱状採泥器による柱状試料の採取、得られた試料の観察とサブサンプリングが実施された。コア採取の方法では、配布された資料や現物をみながら、つかみとり式採泥器、重力柱状採泥器、投下式ピストン採泥器など各種サンプラーの特徴や使用法が説明された。

現在、深見池には沈降粒子を捕集するためのセディメントトラップが3箇所(名古屋女子大、日大、都立大)に設置されている。そのうち二週間前に都立大により入れられたものを湖から引き上げ、中身を観察した。重石でつけてあった灰色のコンクリートは底層の硫化水素の影響で黒色に変化していた。ここでは加藤氏が捕捉した沈降粒子の特徴の説明や採取したサンプルの保存方法の実演をおこなった。また、福澤氏から、沈降粒子を効率よく捕集するためのつり下げ期間やセディメント・トラップの形状についての解説があった。

続いて都立大が所有するマッカーラス



長野県深見池における野外講習会でのピストンコアリング。一つの失策は救命胴衣を付け忘れていたこと。(本郷宙軌撮影)

(Mackereth) サンプラーによる柱状試料採取がおこなわれた。サンプラーは夏原技研製で、一度に4mの堆積物を採取でき、作業は2～3名で可能である。このサンプラーでは、水底にかかる静水圧を利用して採泥器を水底上に固定させ、ポートの上から圧搾空気を送り込み、中にピストンを固定した採泥管(塩ビパイプ)を地層中に押し込むことで柱状試料を採取する。引き抜くときは底のアンカーチャンバーに空気を送り、サンプラー内と外の圧力差を利用してサンプラーを水上に飛び上がらせるので、引き上げ時にサンプラーに直撃されないように注意する必要がある。サンプラーの組立では、各接合部へのグリスの塗布、ネジ締め、ワイヤー



長野県深見池の196年間の年縞。採取したコアを縦方向に半割にしたところ。(宮地良典撮影)

の取り付けなど完成に至るまでの詳細な行程を観察することができた。とくに経験豊富な山田氏の作業は手慣れたものだった。組立完了後、数名がボートに乗って湖心付近にサンプラーを搬送し、いよいよコア採取となった。湖岸に陣取った参加者は水中からサンプラーが飛び出て来る様子をカメラやデジカメに収めようと身構えていた。順調に作業が進み、サンプラーは無事水上に飛び出した。その後、大友氏により重力式サンプラーによる長さ1mの柱状試料採取が実演された。しかし、採取終了後、岸に上がるうとした大友氏がバランスを崩して池に落ち、同船していた木戸氏、小森氏もつられるように落水した。湖岸だったので大事には至らなかったが、水辺域での調査では救命胴衣を必ず着用するなど、安全面への配慮を再確認させられた。

採取したコア堆積物が半割されるとききれいな明暗褐色ラミナ(年縞)が出てきた。年縞の形成は深度約2.3m以深で何度か中断されていた。とくに深度2.3m付近の材木片を含む礫質砂層は今回採取したコア以外にも広く認められており、地滑りによって生じた土砂が湖に流入して堆積したと考えられている。コア観察後、軟X線写真撮影用試料や各種分析用試料などが採取された。この場面では、参加者が自分の手でサブサンプリングをして、軟弱堆積物をきれいにサンプリングすることの難しさを体感できればよかったと思う。X線ケースに入れられたサンプルは参加者がお土産として持ち帰ることになり、最後は冷たいジュース(一部ビールあり)で喉を潤し、当初の予定通り午後3時過ぎに解散となった。今回の講習会は、サンプラーの組立方やサンプリング方法、湖沼堆積物(とくに年縞)を自分の目でみるということができたという点で、今後につながる貴重な経験となった。

なお、今年10月以降に「湖沼・内湾・レス堆積物コアの解析法」に関する室内講習会が都立大理学部で開催される。この室内講習会では2日間に渡り、コア解析の説明やコアの記載、分析法の講習(粒度分析、初磁化率測定、XRF・ICPによる元素分析など)がおこなわれる。詳細については第四紀通信などを参照していただきたい。

日本学術会議主催公開講演会のお知らせ

「先端科学技術と法 進歩・安全・権利」主催 日本学術会議

日時：平成14年11月29日(金) 10:00～17:30 (開場 9:30)

会場：日本学術会議講堂(東京都港区六本木7-22-34)

定員：先着300名

申込み：平成14年11月1日(金)締切

詳しくは以下までお問合せ下さい。

日本学術会議事務局総務部庶務課気付

〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34

TEL: 03-3403-1906 FAX: 03-3403-6224

E-mail: info@scj.go.jp

研究委員会 2001 年度活動報告

アジア太平洋層序研究委員会

(委員長：熊井久雄)

この研究委員会は INQUA の Subcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Region の国内対応委員会として、96年の第四紀学会総会で承認されて以降、この Subcommission の国内委員を中心として約30名の会員によって構成されています。最近の主たる事業は、1999年に南アフリカで開催された Subcommission のビジネスミーティングの際に策定された INQUA インターコングレスの研究計画にしたがって、東アジアの第四系高解像度対比とそれにもとづく古環境の地域的な相違の究明を行うための共同研究と討論会の開催です。その第一段階国内シンポとして、1999年9月に第四紀総合研究会と共催で、日本海沿岸の上部更新統の精密層序に関するシンポジウムを開催しました。このシンポジウムのポストプリントは第四紀総合研究会連絡誌「第四紀」No.32に特集されています。2000年度には、10月に第四紀総合研究会と共催で八ヶ岳山麓の第四系に関する巡検とシンポを開催しました。このシンポのポストプリントは第四紀総合研究会連絡誌「第四紀」No.33に特集号としてまとめられています。また、2001年10月には大阪市立大学国際シンポジウムの一環として、Subcommission on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Region のセッションを開催しました。1日のセッションで、インドやインドネシア、ロシア、タイ、ネパール、中国などから約30名の参加があり、8題のオーラルと7題のポスターが寄せられました。セッション終了後、Subcommission のビジネスミーティングがもたれ、2003年のリノ市での INQUA 大会への対応などが話し合われました。このポストプリントは「Gondwana Research」誌に特集される予定です。また、最近恒例となっている第四紀総合研究会との共催シンポジウムは10月6～8日に富士山麓で火山ハザードマップに関するシンポジウムと富士山の火山層序に関する巡検が行なわれました。2002年度の第四紀総合研究会との共催シンポは10月12日から14日まで、南部信州の火山灰層序に関するシンポと巡検が予定されています。

海面変化・海岸環境変遷研究委員会

(委員長：大村明雄)

2001年度における本研究委員会の活動は、国際第四紀連合 (INQUA) 大会の中間年に当たる昨年10月17～24日の8日間、「First International Meeting on Sea-level Changes and Coastal Evolution and Neotectonics」を、台湾の5つの機関やグループと共に、「The

1st International Meeting on Sea-level Changes and Coastal Evolution and Neotectonics」を国立台湾大学において開催したことに尽きる。報告に先立ち、後述する本国際会議の成功は、INQUA Commission on Sea-level Changes and Coastal Evolution の太田陽子副委員長と台湾国立大学地球科学教室の Ping-Mei Liew (劉平妹) 教授の献身的な御尽力によるものであったことを記し、ここで深謝の意を表したい。なお、この会議は、第15回 INQUA (Durban) 大会で、台湾の INQUA への加盟が認められたことと台湾中部で1999年9月21日深夜発生した集集大地震2周年を機に開催されたものでもある。

3rd Circularによれば、本会議へは14ヶ国55名が参加予定であったが、開催前に発生した同時テロ事件の影響で、参加者数が大幅減になることが危惧された。事実、その影響等で不参加を余儀なくされた人達もいたが、幸い参加者数は、14ヶ国からの約70名(現地の学生等を含めると総数は約100名に達したとの情報もあり、日本からの参加者は15名)であった。会議内容は、山口勝氏による第四紀通信, vol.8, no.6, p.5-6の報告に詳しいので、それを参照していただくことにし、ここではその概要のみを紹介する。会議期間中は、2日間の口頭発表とポスター発表と4日間の巡検が実施された。初日(10/17)は、参加者登録・Palace Museumへのツアー・歓迎レセプション。2日目(10/18: 主要テーマ 海面変動と地殻変動)と3日目(10/19: 活断層とネオテクトニクス)に口頭およびポスター発表が行われ、合計16の口頭発表と12のポスター発表が予定されていた。上記の理由で、開催当日になって、急遽プログラムが変更されたが、口頭発表は22、ポスター発表が14実施された。会議後の4日間の巡検期間中、前半2日間は台湾の東海岸沿いの変動地形を、後半2日間で集集大地震断層とそのトレンチ調査の現場を訪れ、いずれも、活発な質疑応答が行われ、極めて有意義であった。

なお、本会議で発表された発表論文は、INQUA機関誌“Quaternary International”特集号として刊行するため、論文原稿の募集を行ったところ、すでに編集者の手許に16編以上が届いたと聞く。

最後に、本国際会議を終え、未加入の東および東南アジアの国々や地域の INQUA への加入をより一層促進することが、太平洋地域における第四紀学の今後の発展にとって最重要課題であることを再確認した。

古土壌研究委員会

(委員長：坂上寛一)

この委員会は、INQUA の Commission on Paleopedology の国内対応委員会として、

1999年度から活動している。

古土壌の研究検討の場として、2002年8月14-21日にタイ国のバンコクで開催される17th World Congress of Soil Scienceがある。そのWorking groupとしてPaleopedologyのシンポジウムがあり、コンピナーは、INQUAのCommission on PaleopedologyのPresidentでもあるA. Brongerである。シンポジウムのテーマは、"Paleosols as a memory for understanding landscape history and environmental problems"であり、非埋没古土壌あるいはレリック土壌(relict soil)に焦点を当てている。主として異なった気候・植生条件下で形成された多元土壌について、それぞれの形成時のメモリーを、いかに抽出するかが課題である。また、ここに得られた環境と土壌の態様の関係を結ぶ成果を活かして、現代の環境問題を適切に評価することも目指されている。

本研究委員会独自の活動としては、2002年7月20日に千葉県市原市の周辺で、「古土壌調査検討会」を遺跡層序研究会と共催した。海岸砂丘帯でのクロズナ、沖積河岸段丘面での縄文時代中期の遺物包含層(文化層)など、非火山灰母材での古土壌の形成について、古土壌を目の前にして、種々の議論・検討がなされた。

2002年9月5-7日には、テフラ・火山研究委員会およびネオテクトニクス研究委員会と共催で、「巡検とシンポジウム」を予定し、南関東のローム層を総合的に見直すべく、準備を進めている。南関東における関東ローム層を主対象として、多摩丘陵、相模野台地、富士・愛鷹火山麓を巡検する。専門を異にする多様な研究者が同じ土壌断面を見ながら、「関東ローム層の堆積と土壌形成」、「関東ローム層と考古遺物との関係」などを議論する。最終日は、明治大学駿河台キャンパスで締めくくりのシンポジウムをもつ。

ネオテクトニクス研究委員会 (委員長：奥村晃史)

ネオテクトニクス研究委員会は2000年1月29日の評議員会において設立を承認され、1999年度から2002年度までの4年間、断層・地震性地殻変動・広域地殻変動などの研究に携わる日本の研究者の交流と国際的な情報発信を推進する目的としている。本委員会は1999年8月、ダーバンで開かれた国際第四紀研究連合第15回大会のネオテクトニクス研究委員会に参加した会員を中心に設立が準備された。大会後トルコ・台湾で起きた大地震の被害は第四紀テクトニクスの観点からの長期的地震危険度評価の重要性を改めて認識させるものであった。1999年度には設立承認の直

前に、奥村が組織委員の一人として『北淡国際活断層シンポジウム』を開催した。世界各国の主要な研究者と日本の多数のネオテクトニクス研究者あわせて200名あまりが参加した。会議では1995年兵庫県南部地震以降5年間研究を総括し、またトルコ・台湾地震の最新の研究成果を交換して、ネオテクトニクス研究を地震災害軽減につなげるための努力がすすめられ、研究委員会の目標を確認する好機となった。2000年度には、2001年5月にフィールドワークショップ「房総半島の地震地殻変動：新たな視点(オーガナイザー：宮内崇裕・荻谷愛彦・奥村晃史)」を開催した。この集会では1950代に革新的なアイデアとして提示された、元禄タイプの地震の繰り返しによる4面の完新世海成段丘の離水・隆起モデルは、半世紀の後に根本的な見なおしを迫られていることを確認した。2001年度は、本研究委員会独自の集会は開催されなかったが、2001年10月に台湾で開催されたINQUAの海面変化およびネオテクトニクス両研究委員会主催の"The First International Meeting on both Sea-level changes and coastal evolution (INQUA) and Neotectonics (INQUA)"に複数のメンバーが参加した。また、研究会のメンバーによって、阿寺断層、糸魚川-静岡構造線活断層系、北アナトリア断層、サンアンドレアス断層などの調査が進められた。2002年度には、当初第四紀学会松本大会にあわせて牛伏寺断層見学会を予定していたが、10月以降下葛木断層などで実施される地層抜き取り・トレンチ調査にあわせて、糸魚川-静岡構造線活断層系ワークショップを開催する予定である。また、テフラ・火山研究委員会、古土壌研究委員会及び日本学術会議第四紀研究連絡委員会と共催で9月に南関東の関東ローム層と地殻変動に関するワークショップを準備している。

高精度¹⁴C年代測定研究委員会 (委員長：中村俊夫)

2000年第四紀学会歴博大会におけるシンポジウム“21世紀の年代観-炭素年から暦年へ”およびその際に発信された“佐倉宣言”を受けて、高精度¹⁴C年代測定研究委員会が設置された。

前期の研究委員会活動としては、2002年3月3日に第1回研究委員会を第四紀学会・第四紀研究連絡委員会共催の公開シンポジウムとして日本大学にて開催した。参加者は、67名であった。この委員会では、まず、¹⁴C年代から暦年代への較正について、測定サイドと利用者サイドから3件の報告、また年輪年代学を用いて縄文時代の編年研究について1件の報告があり、発表内容に関連して全参加者

での活発な議論が行われた。また、同シンポジウムでは議論する時間がとれなかったが、 ^{14}C 年代に係わる用語の統一、校正データの表示法などについてのまとめが、国際誌Radio-carbonで採用されている例などの紹介を含めて公開された。

用語の統一については、第四紀研究に掲載される論文中での表記の統一を図る必要があり、2002年度内には研究委員会から結論をまとめる必要がある。

次回の研究委員会では、用語表記法の問題と合わせて、炭素リザーバーによる ^{14}C 濃度変動の問題（海産物試料の取り扱い）等を議論する予定である。

また、国際対応としては、既に第四紀通信で連絡済みであるが第9回加速器質量分析国際会議を2002年9月9-13日に名古屋大学にて開催することになっており、本学会会員が多数参加する予定である。この国際会議では、AMSによる ^{14}C 代測定に関連して、 ^{14}C 年代から暦年代への校正、 ^{14}C 年代測定の実験室間比較が重要なテーマになっている。さらに、2003年にはRadiocarbon国際会議がニュージーランドで開催されることが決まっており、詳細については後日報告する。また、国際第四紀連合(INQUA)との対応も進める予定である。

テフラ・火山研究委員会 (委員長：鈴木毅彦)

この研究委員会は、INQUA Commission on Tephrochronology (COT)に対応する委員会として1992-1999年度にかけて活動したテフラ研究委員会を継承したものである。COTが1995年INQUAベルリン大会でINQUA Commission for

Tephrochronology and Volcanism (COTAV)に変更したのに伴い、テフラ研究委員会もテフラ・火山研究委員会と名称を改め、2000年度よりあらたな研究委員会として活動を開始した。活動目的は、COTAVに関連する情報を委員会のメンバーに伝達し、野外巡検を中心とした研究集会を行ない、最新の研究成果を内外の研究者間に紹介すると同時に交流の機会を与えるなどの活動を行なうことである。2001年度の活動は以下のとおりである。

(1)2001年度は、月刊地球特集号「明日のテフラ研究」(海洋出版社)を2001年9月に刊行した。これは、2000年106日に第四紀研究連絡委員会との共催で開催したシンポジウム「明日のテフラ(火山灰)研究を考える：火山からのメッセージを解読する」(日本学術会議、世話人：町田 洋・吉川周作・鈴木毅彦)の内容である。15件の講演の中で13分が掲載されている。

(2)2002年9月5～7日には、古土壌研究委員会、ネオテクトニクス研究委員会及び日本学術会議第四紀研究連絡委員会との共催で、野外研究集会とシンポジウムを予定し、南関東のローム層を総合的に見直すべく準備を進めている。南関東における関東ローム層を主対象として、多摩丘陵・相模野台地・富士・愛鷹火山麓で巡検を行なう。専門を異にする多様な研究者が同じ土壌断面を見ながら、「関東ローム層の堆積と土壌形成」、「関東ローム層と考古遺物との関係」などを議論する。最終日は明治大学駿河台キャンパスでシンポジウムを開催予定。詳細な内容は第四紀通信2002年4号に掲載されている。

2003年度猿橋賞授賞候補者及び研究奨励費助成候補者の推薦依頼について

『女性科学者に明るい未来をの会』より、下記の猿橋賞授賞候補者と研究奨励費助成候補者の推薦依頼がきています。自薦・他薦等ありましたら、規定の用紙(庶務幹事に請求下さい)に記入のうえ、11月10日までに、庶務幹事まで提出して下さい。

・猿橋賞

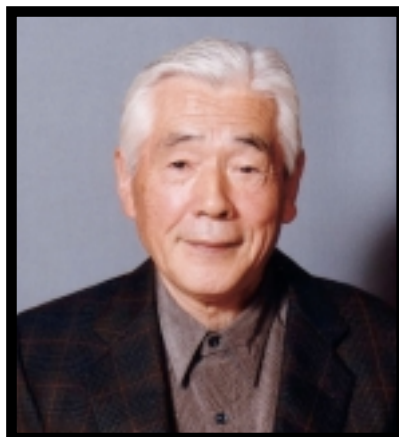
対象：自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(50才未満)
表彰：本賞は賞状とし、副賞として賞金30万円をそえる。

・研究奨励費

対象：海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する女性研究者(40才未満)
助成金：1件10万円とし、年に数件。

連絡先：〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学大学院理学研究科地理学教室
鈴木毅彦
Tel.0426-77-2590, Fax.0426-77-2589, E-mail: suzuki@comp.metro-u.ac.jp

元会長井関弘太郎先生のご逝去を悼む



日本第四紀学会元会長・名誉会員，井関弘太郎先生は，平成 14（2002）年 6 月 27 日にご逝去されました。享年 77 歳でした。

先生は第四紀学会の創設以来の会員であり，この間，1985 年から 1986 まで会長をつとめられたほか，評議員を 9 期 19 年の長きにわたって勤められ，本会の発展に多大なご尽力ご貢献をなされました。

先生は京都帝国大学文学部をご卒業後，昭和 23 年 4 月に駒沢大学に赴任され，昭和 26 年 3 月まで教鞭をとられた後，昭和 26 年 3 月 25 日に名古屋大学文学部講師として赴任されました。以来，昭和 63 年 3 月 31 日に停年退職されるまで 37 年間の長きにわたり，名古屋大学の講師・助教授・教授，さらに文学部長として，後進の育成と学問の振興にあたられ，多くの卒業生を世に送り出してこられました。名古屋大学停年後は，中部大学教授をつとめられ，また，京都大学をはじめとする多くの大学において非常勤講師としての教鞭もとってこられました。

先生のご研究は海水準変動をはじめとする第四紀の自然環境に関わる最新の知見を積極的にとりいれながら，沖積平野・沖積層の形成・発達や人類の居住に関わる多様な問題に取り組むという，まさに第四紀学のお仕事でありました。とくに，沖積層の層序・層相や埋積谷の形成に関しては，多くのボーリング資料を分析して実証的に検討するとともに，それが海水準変動や気候変化と関連することを早くから指摘するなど，きわめて先駆的なもので，第四紀学における沖積平野・沖積層研究をリードするきわめて大きな貢献をされました。その成果は第四紀学，地理学，考古学，土木工学などの分野からも注目されるとともに，『三角州』（朝倉書店），『沖積平野』（東大出版会）等としてとりまとめられ，多数の後進に多大な影響・刺激を与えてきました。

また，先生のご活躍の場はきわめて幅広く，沖積平野における人文地理学的諸問題や災害問題など，地域の環境に関わる問題にも積極的に発言され，愛知県や名古屋市，名古屋港など様々な行政機関の委員会委員や，名古屋大学出版会長，愛知県埋蔵文化材調査センターの理事を歴任されるなど社会的な活動も積極的に行ってこられました。

昭和 59 年 3 月には中日文化賞を，平成 14 年 5 月には勲二等瑞宝章を受章されるなど，その御業績は輝かしいものであります。

このように，研究・教育，そして地域社会に対する多大な貢献を行ってこられた先生が逝去されたことは，まことに哀悼の念に堪えません。ここにこれまでの数々の先生の御偉業を顕彰し，ご逝去を心から惜しみ，謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

（海津正倫）

東京大学 大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻教官公募のお知らせ

平成 14 年 8 月 30 日

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
専攻長 星野 真弘

地球惑星システム科学講座教官の公募

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻では、下記の要領で地球惑星システム科学講座教官を公募することになりましたので、広く適任者の応募、推薦を求めます。

- 記 -

1. 公募人員

地球惑星システム科学講座 助手 1 名

2. 募集分野

地球惑星における多圏相互作用、地球惑星システムの起源と進化、表層におけるシステム変動、システム動態解析に関連する分野。旧来の研究分野の枠にとらわれない広い視野と新しい視点で、地球惑星システムの理解を目指す方の応募を望みます。研究手法は観測・実験・理論・解析等を特に問いません。

3. 応募資格

博士の学位を有すること（本年度中に取得見込みを含む）

4. 着任時期

2003 年 4 月 1 日

5. 募集方法

自薦または他薦（他薦の場合はご本人が了解していること）

6. 提出書類

1) 履歴書(学歴および職歴)

2) これまでの研究概要(1600 字程度)

3) 研究業績目録(査読論文とそれ以外の総説、著書などに分類)

4) 主要な原著論文別刷り(コピー可)3 編以内

5) 今後の研究・教育の計画および抱負(1600 字程度)

6) 応募者に関する所見を伺える方 2 名の氏名および連絡先

7) 他薦の場合は、上記 1) - 3) 、 6) の内容のわかる文章

7. 応募締切

2002 年 10 月 31 日(木)(消印有効)

8. 書類送付先

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻 星野真弘

電話：03-5841-4584

封筒の表に「システム科学講座助手応募書類在中」と朱筆して(簡易)書留にて郵送のこと

9. 問い合わせ先

〒113-0033 東京都文京区本郷 7 - 3 - 1

東京大学大学院理学系研究科・地球惑星科学専攻 永原裕子

電話：03-5841-4508

E-mail：hiroko@eps.s.u-tokyo.ac.jp

10. その他

* 着任後、理学部・地球惑星物理学科もしくは地学科の学部教育にも携わっていただきます。2003 年 4 月 1 日時点では、地球惑星システム科学講座には以下のメンバーが所属している見込みです。

濱野洋三(教授)、多田隆治(教授)、永原裕子(教授)、松本 淳(助教授)、阿部 豊(助教授)、茅根 創(助教授)、田近英一(助教授)、横山佑典(講師)

* その他、当専攻に関する情報は、ホームページ
(<http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp>) をご覧下さい。

自然史学会連合第8回シンポジウム「極域の生物学 フィールドサイエンスの最前線」

本シンポジウムは、様々な極域（極地、高山、深海ならびに地底）に適応した生物群集の研究にまつわる最新情報や成果を通じて、フィールドサイエンスの最前線の現状や重要性を一般の方々に深く知ってもらう目的で企画され、平成14年度科学研究費補助金研究成果公開促進費を受けて開催されます。

日時：12月7日（土）13時-17時半

場所：国立科学博物館新宿分館講堂（東京都新宿区百人町3-23-1）

講演内容は次の通りです。

- 1) 「南極の陸上生態系 - 極限環境に生きる」・・・国立極地研究所・伊村 智
- 2) 「氷河生態系と地球環境 - 雪と氷の世界の生物たち」・・・東京工業大学・幸島司郎
- 3) 「深海底の化学合成生物群集」・・・長崎大学・橋本 惇
- 4) 「地下に広がる生物圏」・・・静岡大学・北里 洋

参加費や事前申し込みは必要ありませんが、会場の都合で座席数に限りがありますのでご注意ください。（先着順，150席）。

問合せ：〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物第2研究室内
自然史学会連合事務局 篠原現人 TEL 03-3364-7125（もしくは03-3364-2322）
FAX 03-3364-7104 s-gento@kahaku.go.jp
ホームページ <http://www.shizenn.info>

“東海地震”防災セミナー2002[第19回]のお知らせ

昭和59年以来、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日時：平成14年11月14日(木)13:30 - 16:00

会場：静岡商工会議所会館5階ホール（JR静岡駅北口西側）

テーマ：東海地震防災への新たな取り組み 座長：静岡大学理学部教授 里村幹夫
1. 東海地域の最近の地殻変動 国土地理院地理地殻活動研究センター 鷺谷 威
2. 東海地震と木造住宅 東京大学教授 坂本 功

主催：東海地震防災研究会

連絡先：〒422-8035 静岡市宮竹1-9-24 土研究事務所 Tel.:054-238-3240 Fax:054-238-3241

平成15年度笹川科学研究助成募集について

平成15年度笹川科学研究助成の募集案内。

対象：人文・社会科学及び自然科学（医学を除く）または、境界領域の研究計画に関するもの。

締め切り：2002年10月15日。

詳細は以下へお問い合わせください。

財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5F
TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369
E-MAIL : jss@silver.ocn.ne.jp URL: <http://www.jss.or.jp>

2002年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会の開催

文部科学省研究開発局 地震調査研究課

文部科学省は、地方自治体が平成13年度に実施した活断層調査及び堆積平野地下構造調査の成果等を広く普及するため、2002年活断層調査成果および堆積平野地下構造調査成果報告会を開催します。

報告会では発表の他、ポスターの展示などを行います。参加ご希望の方は下記の申込先までファックスまたははがきにてお申し込みください。

開催日 : 平成14年11月18日(月)、19日(火)
会場 : こまばエミナース ホール (東京都目黒区大橋2-19-5)
主催 : 文部科学省

目的 : 地方自治体が実施する活断層調査及び堆積平野地下構造調査の成果等を発表し、これを広く普及させるとともに、専門家等の意見を今後の調査へ反映させることを目的として、成果報告会を開催します。

内容 : 地方自治体が実施した活断層調査と堆積平野地下構造調査のうち、平成13年度で終了した調査の結果および平成14年度も継続中の調査の結果について発表します。また、発表を行った調査についてのポスターセッションもを行います。
なお、プログラム等詳しい内容につきましては、下記連絡先までお問い合わせください。

定員 : 500名(先着順)
参加費 : 無料

申込方法: ファックスまたははがきで、氏名、住所(勤務先又は自宅)、電話・ファックス番号、勤務先名を明記の上、下記までお送り下さい。

締め切り: 11月12日(火)

問い合わせ・申込先:

〒101-0064 東京都千代田区猿楽町1-5-18 千代田本社ビル5階
(財)地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター
活断層・地下構造報告会係
電話: 03-3295-1501 FAX: 03-3295-1507

財団法人 昭和聖徳記念財団 学術研究奨励募集案内

- ・目的: 生物学に関する世界的学者としての昭和天皇の研究分野(系統分類学)およびそれに関する生物学の研究を奨励し、学術研究の推進・発展に寄与することを目的とします。
- ・対象研究分野: 系統分類に関する研究。
- ・研究助成額: 原則として1件あたり50万円以内。
- ・研究助成期間: 1年間(平成15年4月~平成16年3月)
- ・申請: 財団所定の申請書を使用し、下記あてに提出。申請締切日は、平成14年12月10日(火)必着。
- ・資格: 原則として学術研究機関等に属している人、またはグループ・グループの場合、代表者を明確にして下さい。
- ・助成金交付: 当財団の選考委員会により審査内定し、理事会で決定。申請者には文書により通知し、その後の1ヶ月以内に、予め定められた銀行等の口座へ助成金を振り込みます。その他、義務・用途等については下記にお問い合わせ下さい。

提出・問い合わせ先:

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル
財団法人 昭和聖徳記念財団「学術研究」係
TEL 03-3211-2451 FAX 03-3211-7747

評議員会議事録 (2002 年度第 1 回)

日時：2002 年 8 月 23 日 (金) 17:45 ~ 19:00

場所：信州大学理学部 C 棟 12 番講義室

議長：中村俊夫

出席：熊井久雄 (会長), 真野勝友 (副会長), 小野昭 (幹事長), 赤羽貞幸, 岩田修二, 上杉 陽, 海津正倫, 遠藤邦彦, 太田陽子, 大場忠道, 岡田篤正, 小田静夫, 河村善也, 菊地隆男, 小泉武栄, 斎藤文紀, 坂上寛一, 鈴木毅彦, 竹村恵二, 陶野郁雄, 中村俊夫, 福澤仁之, 町田 洋, 松浦秀治, 松下まり子, 松島義章, 松田時彦, 吉川周作 (以上評議員), 委任状 11 通

赤羽貞幸大会実行委員長及び熊井久雄会長の挨拶の後, 中村俊夫評議員を議長に選出し, 下記の報告及び審議が行われた。

< 1 > 報告事項

1. 2001 年度事業報告

1-1. 庶務

- (1) 会員動向 (2002 年 7 月 31 日現在) 正会員 1779 名 (うち, 学生費会員 69 名, 海外会員 20 名を含む), 名誉会員 4 名, 賛助会員 14 社, 団体会員 100 団体.
逝去会員 小澤竹二郎, 多田 堯, 三好真一郎, 粉川昭平, 松田哲夫, 井関弘太郎, 山下秀樹
会員動向 (2001 年 7 月 31 日現在) 正会員 1795 名 (うち, 学生費会員 95 名, 海外会員 21 名を含む), 名誉会員 5 名, 賛助会員 13 社, 団体購読会員 105 団体.
- (2) 2001 年度第 1 回評議員会を 2001 年 8 月 1 日に鹿児島大学教育学部において開催した. 出席者 21 名, 委任状 20 通. 議長: 中田 高. 2001 年総会を 2001 年 8 月 2 日に鹿児島大学教育学部において開催した. 議長: 吉川周作. これらの詳細は, 議事録として第四紀通信 8 巻 5 号に掲載した. 2001 年度第 2 回評議員会を 2002 年 1 月 26 日に筑波大学学校教育学部で開催した. 出席者 23 名, 委任状 13 通, 議長: 菊地隆男. これらの詳細は第四紀通信 9 巻 2 号に掲載した. 2001 年度臨時評議員会を 2002 年 6 月 1 日に日本大学文理学部で開催した. 出席者 15 名, 委任状 24 通, 議長: 織笠 昭. これらの詳細は第四紀通信 9 巻 4 号に掲載した.
- (3) 引用許可の受付, 会員名簿整理, 寄贈図書の手付を行った.
- (4) 以下のシンポジウム・講演会等の後援, 共催, 協賛を行った.
国際シンポジウム「ロディニア, ゴンドワナ超大陸の形成・分裂とアジア大陸の成長」(2001 年 10 月 26 日 ~ 30 日: 大阪市立大学) の後援
国際会議「第 9 回加速器質量分析国際会議」(2002 年 9 月 9 日 ~ 13 日: 名古屋大学) の後援
北海道開拓記念館特別展「洞窟遺跡を残した縄文の人々」(2002 年 9 月 13 日 ~ 11 月 3 日) の後援
第 46 回粘土科学討論会 (主催: 日本粘土学会) (2002 年 9 月 19 日 ~ 20 日: 東北大学) の共催
ICDP 国際ワークショップ「Lake Biwa and Lake Suigetsu: Records of Global Paleo Environment and Island Arc Tectonics」(2002 年 11 月 22 日 ~ 24 日: 京都大学) の後援.

- 18th Himalaya-Karakorum-Tibet Workshop (2004 年 3 月下旬: 日本) の後援
- (5) 日本学術会議への団体登録の手続きを行なった.
 - (6) 2002 年日本第四紀学会論文賞に向けて, 推薦論文の募集を第四紀通信に掲載準備し, 論文賞選考委員の選挙を行った. 熊井久雄会長から推薦された 11 名の候補者に対して, 評議員による選挙を行った結果, 以下の 5 名が候補者として選出された. 遠藤邦彦, 大場忠道, 斎藤文紀, 松浦秀治, 吉川周作. 互選の結果, 大場忠道会長が委員長に就任した. 委員会は選考を行ない, 2 名の授賞者を決定した.
 - (7) 学生会員届の提出について: 最近 2 回の呼びかけにもかかわらず学生会費の更新申込書提出のなかった会員に対しては正会員として会費を請求することとした.
 - (8) 科研費審査委員関係: 平成 15 年度科研費審査にあたり, 次の分科・細目に第四紀研連が審査委員を推薦することを受けて, 第四紀学会幹事会としてその適任者について相談した. 層位・古生物学 (第 1 段委員) および文化財科学 (第 2 段委員).
 - (9) その他: 複写権等委託契約 (学術著作権協会) を行なった. 日本学術会議ホームページアドレスとの相互リンクを結んだ.

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」第 40 巻 5 号 (原著論文 5 編, 短報 2 編, 書評 1 編, 78 頁), 6 号 (特集号: 原著論文 10 編, 総合討論 1 編, 書評 1 編, 114 頁), 41 巻 1 号 (原著論文 4 編, 短報 1 編, 講座 1 編, 書評 1 編, 学会会則等, 72 頁) 2 号 (原著論文 4 編, 短報 2 編, 書評 1 編, 72 頁), 3 号 (原著論文 6 編, 短報 1 編, 78 頁), 4 号 (特集号: 原著論文 11 編, 124 頁) の合計 6 冊, 538 頁を刊行した. 前年度より 10 頁増である.
- (2) 7 月 15 日現在, すでに受理済みの論文は 8 編で, 41 巻 5 号以降に順次掲載の予定である. 審査中の論文は 12 である. 昨年同期に比べ投稿数が減少している.
- (3) 前編集委員会からの引き継ぎにより投稿規定, 編集委員会内規等を検討中である. 時間的な問題で検討が終了せず, 本総会までに改正案を提示できなかったが, 実行可能な改定は順次実施しており, 41 巻 3 号よりコレスポンディング・オーサー制度を導入した.
- (4) 印刷経費・郵送経費低減のため, 表紙および目次頁の紙質を変更した.

1-3. 行事

- (1) 2001 年大会 (総会, 評議員会, シンポジウム, 一般研究発表, 懇親会, 普及講演会, 巡検) を鹿児島大学において, 2001 年 8 月 1 日 ~ 4 日に開催した. 8 月 1 日・2 日には, 鹿児島大学教育学部において, 一般研究発表 (口頭発表 45 件, ポスター発表 24 件) と総会, 評議員会を行い, 8 月 3 日には同じ場所でシンポジウム「南九州における縄文早期の環境変遷」(世話人: 小林哲夫・森脇 広) (話題提供 11 件) を行った. 8 月 4 日には鹿児島大学稲盛会館で「第四紀の自然と人間—琉球から南九州へかけての植物・動物・ヒトを結ぶ道」テーマとして科学研究費補助金による普及講演会を実施し, 多数の参加者があった (講演者: 小田静夫・堀田 満・大塚裕之). また補助金により講演者の協力のもと講演会資料集を作成し配布した. 8 月 4 日には普及講演会と並行して, 「薩摩半島南部 (指宿地域) の遺跡とテフラを

- テーマとする巡検(案内者:成尾英仁・大木公彦)を行った。一般講演・シンポジウム参加者は174名(内会員142名,非会員32名),懇親会参加者は72(一般52名,学生15名など),巡検参加者は29名(案内者2名を含む,参加費実費負担4000円),講演要旨集の販売数は226冊であった。
- (2)2002年地球惑星科学関連学会合同大会(5月27日-31日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催)で,学会提案のセッション「第四紀」(オーガナイザー:宮内崇裕渉外幹事)を5月28日午後(ポスター発表)と29日午前(口頭発表)に行った。口頭発表が10件,ポスター発表が13件であった。
- (3)日本第四紀学会2002年大会の総会,シンポジウム,普及講演会,巡検等の準備を行った。大会は2002年8月23日-27日に信州大学で行われる。8月23日・24日に一般研究発表,評議員会,総会,普及講演会,懇親会が,25日にはシンポジウム「日本アルプスの形成と自然環境の変遷」信州大学総合山岳科学研究所と共催,世話人:三宅康幸・公文富士夫・赤羽貞幸・鈴木毅彦・堤隆)を予定している。8月24日の普及講演会は「糸魚川-静岡構造線活断層系北部地域の活動史と地震災害」(世話人:公文富士夫)というテーマで,開催のため,平成14年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の申請を世話人が中心になって行ったが,残念ながら不採択となった。巡検は26日・27日に3コースで行われる。
- (4)日本第四紀学会2003年大会の会場選定を行った。大阪市立自然史博物館に打診し,内諾を得ている。

1-4. 企画

(1) 2002年ミニシンポジウム

2002年2月23日(土),日本学術会議第四紀研究連絡委員会と共催でシンポジウムを行なった。場所は東京都立大学講堂小ホール。テーマは「旧石器時代研究の新しい展開をめざして-旧石器研究と第四紀学-」で,発表内容は,基調報告として御堂島 正(かながわ考古学財団):「遺跡形成論から見た堆積物としての遺物」五十嵐 彰(東京都埋蔵文化財センター):「型式と層位の相剋-石器と土器の場合-」,馬場悠男(国立科学博物館):「人骨の形態学的判断の信頼性と限界」,町田 洋:「遺物包含層の年代と環境」の4報告である。参加者は200名。

- (2)第8回日本第四紀学会講習会「湖沼・内湾・レス堆積物コアの採取・解析法」(野外講習会:8月22日,室内講習会:10月13-14日)を企画した。

1-5. 広報

- (1)第四紀通信(QR Newsletter)Vol.8. No.5(2001年9月),Vol.8. No.6(2001年11月),Vol.9. No.1(2002年1月),Vol.9. No.2(2002年3月),Vol.9. No.3(2002年5月),Vol.9. No.4(2001年7月)を刊行した。
- (2)学術情報センターネットWWWサーバー上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。

1-6. 渉外

- (1)地球惑星科学関連学会
- ・2002年合同大会において,第四紀学会としてレギュラーセッション「第四紀」を,また地震学会・地質学会と共催で「活断層と古地震」を応募し採

用された。行事報告にあるような内容で無事セッションは終了した。「第四紀」の発表数は合計23(オーラル10,ポスター13)。

- ・2003年合同大会も,従来同様国立オリンピック記念青少年総合センターを予定。運営機構については,2002大会は大会とほぼ同様のメンバーで運営するが,将来を見越して各学会への積極的な参加が呼びかけられている。「第四紀」セッションは,レギュラーセッションを申請する最低発表数20をわずかに超えている程度なので,積極的発表を呼びかける必要がある。また,セッション提案は基本的には20以上の定常的発表数が確保できるようにであれば可能なので,早めに情報を流して会員個人がとりまとめて応募することを支援する。

(2) 自然史学会連合

- ・学会連合総会が2001年11月10日に国立科学博物館新宿分館で開催された。決算・執行状況が報告され,予算案,地域博物館アクションプラン,自然史教育プランに関する審議・議論がなされるとともに,新執行部の選出が行われた。代表は再選で,森脇和郎氏。また,総会后に第7回シンポジウム「遺物が語る自然史」分館・研修研究館)が開催された。

- ・生物多様性国家戦略見直しについての意見書を2002年3月8日付けで環境省大臣大木浩宛てに提出。内容は現行の「生物多様性国家戦略」に対して以下の4点の改善案を進言した(1:効果的な教育システムの構築,2:生物多様性の歴史的理解,3:自然史情報の集積と資料の継続的管理,4:調査研究の拡大)。

- ・学術雑誌に対する本年度の科学研究金補助金の交付について

自然史学会連合でのとりまとめによると,連合加盟学協会のうちいくつかは交付金が増額したとの一方で,採択の学会,返り咲いた学会もあり,例年より目だった動きがあった。採否の基準等に関しては,インパクトファクターとなる雑誌の質的向上(英文比率・外国人編集委員・国際化への努力)の有無が判断材料(学術振興会)が重要であるので,各学会とも鋭意努力することが必要である。

不採択:日本菌学会,日本古生物学会,日本地

形学連合

採択:日本衛生動物学会,日本地理学会,日本魚類学会,日本遺伝学会,日本人類学会

未申請の学会:日本花粉学会,日本第四紀学会,植物地理・分類学会,地衣類研究会,日本蘚苔類学会,日本哺乳類学会,日本霊長類学会,日本蜘蛛学会

2. 2001年度決算報告・会計監査報告 資料参照

福澤仁之会計幹事から別添資料に基づき決算報告があった。引き続き坂上寛一,松浦秀治会計監査から予算の執行,帳簿・証票の整理などが正常適切に処理されていることと報告があった。また付帯意見として口頭で以下のことが述べられた。2001年度は結果的に収入が多く,支出が抑えられて恵まれていた。しかし赤字となりここ数年繰越金を使用していること,この何年間サービス向上しているにもかかわらずよくやっていることが言及され,何からの手だてが必要であることが指摘された。

3. 研究委員会報告

詳細は,研究委員会活動報告記事を参照して下さい。

4. 日本学術会議第四紀研究連絡委員会報告
町田 洋委員長から、平成13年10月30日(第4回委員会)以降平成14年6月7日(第7回委員会)にかけての委員会報告があったが、第6回委員会までの記事は既に第四紀通信に掲載済み。評議員会では第18期が延長されるかもしれないという状況と、以下に示す第7回委員会に関する報告がなされた。

< 第7回委員会報告 >

- (1) 科研費審査委員関係：平成15年度科研費審査にあたり、次の分科・細目に第四紀研連から審査委員を推薦することになった。層位・生物学(第1段委員)および文化財科学(第2段委員)。なお委員の推薦は第四紀学会と相談の上、行った。
- (2) 次回INQUAリノ大会への準備企画：日本第四紀とその研究の魅力を伝え、かつ日本招致の趣旨を盛り込んだCDを作成することについて、その骨子を論議した。
- (3) 研連主催シンポジウムの企画：平成14年9月にテフラ・古土壌・考古学3分野に共通するシンポジウムを企画することが練られた。

5. 論文賞選考過程報告

論文賞授賞候補者選考委員会の大場忠道委員長から2002年日本第四紀学会論文賞の選考結果の報告があった(詳細は本号の、2002年日本第四紀学会論文賞記事、2002年日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考結果報告記事を参照)。

< 2 > 審議事項

以下の事業計画が審議され、承認された。

1. 2002年度事業計画

1-1. 庶務

(1) 研究委員会に関して

以下の6委員会から届いている2002年度の継続希望が、審議の結果承認された。アジア太平洋層序研究委員会：1996-1999年度：助成金交付、代表者名：熊井久雄、2000-2002年度：交付なし継続、海面変化・海岸環境変遷研究委員会：1999～2002年度(4年間)代表者：大村明雄、古土壌研究委員会：1999～2002年度(4年間)代表者：坂上寛一、ネオテクトニクス研究委員会：1999～2002年度(4年間)代表者名：奥村晃史、高精度14C年代測定研究委員会：2000～2003年度(4年間)代表者：中村俊夫、テフラ・火山研究委員会：2000年度～2003年度(4年間)代表者：鈴木毅彦。

- (2) 論文賞授賞候補者選考委員会を組織し、その運営を行なう。
- (3) 財政健全化のための諸施策を検討する。
- (4) 学会受け入れ図書等の整理を行なう。また管理についての検討を行なう。

1-2. 編集

- (1) 「第四紀研究」第41巻5号、6号、42巻1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。
- (2) 2002年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し、企画・編集等にあたる。
- (3) 「第四紀研究」編集に関わる諸課題を整理して、編集体制・運営や規定・内規などの見直しを進め、可能なものから順次実施していく。

1-3. 行事

- (1) 2003年6月に国立オリンピック記念青少年総

合センターで開催予定の2003年地球惑星科学関連学会合同大会に参加するための準備をする。

- (2) 2003年大会は2003年8月28日～9月1日の日程で総会、般研究発表、普及講演会、シンポジウム、巡検などを行う準備を進める(実行委員長：吉川周作、委員：趙 哲済、松田順一郎、小倉徹也、中条武司、那須孝悌、樽野博幸、三田村宗樹・熊井久雄)。主会場は大阪市立自然史博物館で、シンポジウムは大阪平野を中心に後期更新世以降の都市地盤形成史と人類のインパクトに関するもの、普及講演会は「大阪100万年の自然と人の暮らし」(仮題)が検討されている。巡検は京阪奈丘陵と東大阪の遺跡を対象としたコースを検討中である。
- (3) 2004年の日本第四紀学会大会の開催地を選定する。

1-4. 企画

- (1) ミニ・シンポジウムを2003年1月に開催する方向で検討準備する。また技術講習会などを企画する。
- (2) 50周年記念事業委員会の設置：本会の50周年(2006年)を迎えての記念事業を実施する。具体的には、学会内に50周年記念事業の委員会を今年度設置する。委員会では広く会員にも意見をもとめ、2002年度中に事業を決定し原案を作成して、幹事会へ答申する。(補足：幹事会としては、既に2回の議論を経て、1)「日本第四紀地図」の改訂新版を英文にて出版することと、2)第四紀学に関する国際会議を主催することが50周年事業として望ましいと現在考えている)

1-5. 広報

- (1) 第四紀通信(QR Newsletter) Vol.9. No.5, 6号, Vol.10. No.1, 2, 3, 4号を刊行する。
- (2) 学術情報センターネットWWWサーバー上の日本第四紀学会ホームページを通じて継続して広報活動を行う。
- (3) ホームページの充実に向けて工夫する。

1-6. 渉外

- (1) 地球惑星科学関連学会については今後も合同大会においてセッションを設け共催する。
- (2) 第四紀学会としては、加盟学会連合である自然史学会連合、地質科学関連学協会、地球環境科学関連学会協議会に積極的に参加し、その活動の一翼を担う。

2. 2002年度予算案 資料参照

福澤仁之会計幹事から説明があった。

3. 会則の改定(会費の値上げ)について

上記の件については、6月1日に開催された臨時評議員会で審議され、了承されたことであるが、改めてその中身について確認された。会則の改定(会費の値上げ)についての詳細は、本号の2002年度総会議事録を参照。

4. その他

小野 昭第四紀研究連絡委員会委員(考古・人類)の長期海外出張をうけて、前回、評議員による選挙(第18期日本学術会議第四紀研究連絡委員会選挙)で次点であった松浦秀治評議員が委員となることが確認された。

資料 (1) 2001年度収支決算報告書
(2001年8月1日から2002年7月31日)

収入の部

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会費	13,372,600	13,172,400	-200,200	
正会員	12,052,600	11,797,900	-254,700	通常会員(過年度)会費 11,193,000円(628,000円) 学生会員会費 486,000円 海外会員会費 118,900円
賛助会員	320,000	320,000	0	
団体会員	1,000,000	1,054,500	54,500	
誌代	1,700,000	2,162,832	462,832	Back No., 定期雑誌仕入, 予稿集売上, 特集号売上
別刷代・超過頁代収入	500,000	772,187	272,187	
雑収入	500,000	606,146	106,146	会員名簿広告料, JICST, 大会余剰金, 著作権料収入
利子収入	16,000	5,959	-10,041	普通預金, 定期預金, 金銭信託, 貸付信託 各利息
役員選挙積立金取崩	0	0	0	
名簿作成積立金取崩	600,000	600,000	0	2001年会員名簿作成用
収入合計	16,688,600	17,319,524	630,924	
前期繰越金	3,564,632	3,564,632	0	
合計	20,253,232	20,884,156	630,924	

支出の部

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会誌発行費	7,300,000	7,086,906	213,094	第四紀研究 40巻4号～41巻3号 計6号
印刷費	4,200,000	3,893,673	306,327	
編集費	2,500,000	2,727,873	-227,873	
別刷印刷費	600,000	465,360	134,640	第四紀研究 40巻4号～41巻3号 計6号
会誌発送費	1,300,000	1,003,659	296,341	第四紀研究 40巻4号～41巻3号 計6号
会報発行費	650,000	602,490	47,510	第四紀通信 8巻4号～9巻3号 計6通信
会報発送費	170,000	160,330	9,670	
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2002年用(信州大学)
巡検準備金	100,000	100,000	0	2002年用(信州大学)
講演会・シホジツム費	100,000	240,240	-140,240	
予稿集印刷費	500,000	108,045	391,955	2001年鹿児島大会講演要旨集 350冊
学会賞費	120,000	111,740	8,260	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	350,000	335,174	14,826	会費請求書発送郵税等
会議費	50,000	27,957	22,043	会計監査会議室使用料等
旅費・交通費	400,000	390,580	9,420	幹事会旅費等
印刷費	150,000	100,909	49,091	総会資料, コピー代
業務委託費	3,454,999	3,477,400	-22,401	資料(5) 参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
INQUA対策費	0	0	0	
役員選挙費	0	0	0	
名簿作成費	1,800,000	1,556,792	243,208	2001年会員名簿作成費
名簿発送費	0	0	0	
INQUA対策積立金	100,000	100,000	0	
役員選挙費積立金	300,000	300,000	0	
名簿作成積立金	500,000	500,000	0	
予備費積立金	1,000,000	1,000,000	0	
研究委員会助成金	200,000	120,000	80,000	40,000円×3委員会
加盟学協会分担金	20,000	20,000	0	
雑費	150,000	130,983	19,017	慶事費, 各種手数料等
予備費	50,000	0	50,000	
支出合計	19,264,999	17,873,205	1,391,794	
次期繰越金	988,233	3,010,951	-2,022,718	
合計	20,253,232	20,884,156	-630,924	

会計資料

資料 (4) 2002年度予算案 (2002年8月1日から2003年7月31日)

収入の部

(単位：円)

科目	2002年予算案	2001年決算額	2001年予算額	摘要
会費	12,990,000	13,172,400	13,372,600	
正会員	11,650,000	11,797,900	12,052,600	7,000円×1,690名×95%+(学生5,000円×70名×90%)+(海外会員100,000円)
賛助会員	340,000	320,000	320,000	20,000円×14社(17口)
団体会員	1,000,000	1,054,500	1,000,000	10,000円×100団体/105口×96%
誌代	1,700,000	2,162,832	1,700,000	Back No, 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	500,000	772,187	500,000	
雑収入	200,000	606,146	500,000	JICST等
利子収入	10,000	5,959	16,000	
役員選挙積立金取崩	300,000	0	0	
名簿作成積立金取崩	0	600,000	600,000	
INQUA対策積立金取崩	400,000	0	0	
科研費補助金・助成金	0	-	-	2002年度から設けた費目
収入合計	16,100,000	17,319,524	16,688,600	
前期繰越金	3,010,951	3,564,632	3,564,632	
合計	19,110,951	20,884,156	20,253,232	

支出の部

(単位：円)

科目	2002年予算案	2001年決算額	2001年予算額	摘要
会誌発行費	7,300,000	7,086,906	7,300,000	第四紀研究 41巻4号～42巻3号
印刷費	4,200,000	3,893,673	4,200,000	計6号
編集費	1,300,000	2,727,873	2,500,000	
編集人件費	1,200,000	-	-	編集書記人件費
別刷印刷費	600,000	465,360	600,000	
会誌・会報発送費	1,300,000	1,003,659	1,300,000	第四紀研究 41巻4号～42巻3号
会報発行費	650,000	602,490	650,000	第四紀通信 9巻4号～10巻3号
会報発送費	170,000	160,330	170,000	
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2003年用(大阪市立大学)
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2003年用(大阪市立大学)
講演会・シポシム費	100,000	240,240	100,000	
予稿集印刷費	500,000	108,045	500,000	2002年信州大学大会講演要旨集
学会賞費	120,000	111,740	120,000	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費	100,000	0	100,000	
通信費	350,000	335,174	350,000	会費請求書発送郵税, 事務通信費等
会議費	50,000	27,957	50,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	400,000	390,580	400,000	幹事会等交通費
印刷費	150,000	100,909	150,000	総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	3,484,215	3,477,400	3,454,999	資料(6)参照
特別刊行物編集費	0	0	0	
50周年事業対策費	0	-	-	2002年度から設けた費目
INQUA対策費	500,000	0	0	
役員選挙費	600,000	0	0	2003-2004年度役員選挙費用
名簿作成費	0	1,556,792	1,800,000	
名簿発送費	0	0	0	
INQUA対策積立金	0	100,000	100,000	
役員選挙費積立金	0	300,000	300,000	
名簿作成積立金	500,000	500,000	500,000	
予備費積立金	600,000	1,000,000	1,000,000	
研究委員会助成金	200,000	120,000	200,000	40,000円×5委員会
加盟学協会分担金	20,000	20,000	20,000	自然史学会連合
雑費	150,000	130,983	150,000	
助成金支出	0	-	-	2002年度から設けた費目
予備費	50,000	0	50,000	
支出合計	17,794,215	17,873,205	19,264,999	
次期繰越金	1,316,736	3,010,951	988,233	
合計	19,110,951	20,884,156	20,253,232	

資料(5) 2001年度業務委託費
(2001年8月1日～2002年7月31日)

1. 会計業務費	3,222,810
2. 企業管理費	190,000
3. 企業経営・学会誌発行費(印刷)	1,796,400 (1,896円× 948円)
4. 印刷費(印刷)	31,800 (49円× 792円)
5. 印刷費(印刷)	320,000 (1,908円× 1,680円)
6. 印刷費(印刷)	34,800 (348円× 1,000円)
7. 印刷費(印刷)	75,000 (750円× 100円)
8. 印刷費(印刷)	2,300 (23円× 100円)
9. 印刷費(印刷)	54,000 (11,800円× 450円)
10. 印刷費(印刷)	144,000 (60円× 18,000円)
11. 印刷費(印刷)	320,000
12. 印刷費(印刷)	468,000
13. 印刷費(印刷)	105,810
合計	3,471,400

資料(6) 2002年度業務委託費見積
(2002年8月1日～2003年7月31日)

1. 会計業務費	3,220,000
2. 企業管理費	190,000
3. 企業経営・学会誌発行費(印刷)	1,760,000 (2,000円× 880円)
4. 印刷費(印刷)	35,000 (50円× 700円)
5. 印刷費(印刷)	320,000 (1,909円× 1,680円)
6. 印刷費(印刷)	34,800 (348円× 1,000円)
7. 印刷費(印刷)	80,000 (800円× 100円)
8. 印刷費(印刷)	2,300 (23円× 100円)
9. 印刷費(印刷)	98,000 (11,800円× 840円)
10. 印刷費(印刷)	144,000 (60円× 18,000円)
11. 印刷費(印刷)	320,000
12. 印刷費(印刷)	468,000
13. 印刷費(印刷)	105,810
合計	3,494,810

貸借対照表

(2002年7月31日現在)

借方		貸方	
現金	1,954,844	未払印刷	747,185
小口現金	191,818	前払金	7,696,354
普通預金	9,307,743	INQUAT基金積立	493,000
定期預金	6,200,000	役員退学積立金	393,000
		名簿印刷積立金	593,000
		予備費積立金	5,000,000
		合計	14,633,457
		前払金	3,594,672
		印刷費未払	-553,681
		(印刷費積立)	3,111,951
合計	17,654,411	合計	17,654,411

財産目録

(2002年7月31日現在)

資産目録		負債目録	
現金	1,954,844	未払印刷	747,185
小口現金	191,818	前払金	7,696,354
普通預金	9,307,743	INQUAT基金積立	493,000
定期預金	6,200,000	役員退学積立金	393,000
		名簿印刷積立金	593,000
		予備費積立金	5,000,000
合計	17,654,411	合計	14,633,457
負債目録		純資産目録	
未払印刷	747,185	第四紀研究41巻2号	247,185
前払金	7,696,354	2002年度入会費	7,696,354
積立金	493,000	INQUAT基金積立	493,000
		役員退学積立	393,000
		名簿印刷積立	593,000
		予備費積立	5,000,000
合計	14,633,457	合計	14,633,457

2002年度総会議事録

日時：2002年8月24日(土) 10:50～13:00
 場所：信州大学理学部大会議室 C棟2階
 出席者：70名，委任状126通
 議長：齋藤文紀

赤羽貞幸大会実行委員長及び熊井久雄会長の挨拶の後、齋藤文紀評議員を議長に選出し、下記の報告及び審議が行われた。

< 1 > 報告事項

- 2001年度 事業報告
小野 昭幹理事長から評議員会議事録に掲載されている報告事項が報告された。この1年間の逝去会員に対して黙祷が行われた。
- 2001年度決算報告・会計監査報告
福澤仁之会計幹事から別添資料に基づき決算報告があった。引き続き坂上寛一会計監査から予算の執行、帳簿・証券の整理などが正常適切に処理されていることが報告があった。
- 研究委員会活動報告
小野 昭幹理事長から評議員会議事録をもとに、各研究委員会活動報告があった。
- 日本学術会議第四紀研究委員会報告
町田 洋委員長から評議員会議事録に掲載されている報告事項等が報告された。
- 論文賞選考過程報告
小野 昭幹理事長から論文賞授賞候補者選考委員会の選考結果の報告があった。

< 2 > 審議事項

以下の事業計画が審議され、承認された。

- 2002年度事業計画
小野 昭幹理事長から評議員会議事録に掲載されている審議事項が説明され、承認された。
- 2002年度予算案 資料参照
福澤仁之会計幹事から評議員会議事録に基づいて、評議員会で費目が修正された予算案が説明され、承認された。
- 会則の改定(会費の値上げ)について
この件について審議が行われ、承認された。審議では、実際には何時の会費納入時から値上げが始まるかなどの質問が出された。以下は会費の値上げの具体的な内容。
 (1)会費の値上について
 本年6月1日(土)に開催された臨時評議員会では、打開策や具体的な値上金額について協議し、関連同規模学会への調査や予算推移試算をもとに、今回、正会員のみ2,000円の値上げが妥当であるとの結論に達した。その理由として、学会活性化の一環として、学会誌『第四紀研究』を年5号から年6号化し、その目的達成・継続のため、経費節減対策(印刷会社変更に伴う印刷費軽減、発送費及びその手数料の削減)を行いながら、会費を据え置き活動してきた。一方で、最近になり投稿原稿増加にともなって編集費が増大してきた状況や、講習会・ミニシンポジウムなどの日常の活動となる企画に対して予算が組めず、関係者にボランティアをお願いする状況になった。現在の会費では、すでに赤字であるため、学会本来の諸活動に支障をきたしている。
 会費値上げを行った場合の増収分は、学会誌(第

四紀研究・第四紀通信)の充実・発展や講演会・シンポジウム開催などの第四紀学のさらなる普及活動の充実にあてることとした。また、50周年事業やINQUA招致に関わる諸活動の資金としての積立を従来どおり行なうとともに、できる限り会費を値上げしないために、学会財政健全化基金(仮称)の積立計画も今後検討する予定である。以上のような理由で、2002年の総会で会費値上げを目的として、会則第7条[会費]の改定案を提出することになった。

(2)会則の一部改定(会費値上げ)

会則第7条を以下のように改定する：
第7条 会員は総会の議決によって定められた会費を納めなくてはならない。会費は前納とし、年額正会員9,000円(但し、学生・院生は5,000円)、団体購読会員10,000円、賛助会費1口以上(1口20,000円)とする。名誉会員は会費の納入を要しない。1年以上会費を滞納した会員は、評議員会の議をへて除名されることがある。(下線部分が改定部分)

[注1]

正会員会費
1981～1992年: 5,000円
1993～2002年: 7,000円
2003年度改定案: 9,000円

[注2]若手研究者(学生会員)の育成は、学会の将来にとって極めて重要であることから現行のまままで会費を5,000円に据え置く。

[注3]公的な図書館や図書室に『第四紀研究』が恒常的に置かれていることは第四紀研究の普及上重要であると考え、団体会員の会費は、現行のまままで会費を10,000円に据え置く。

[注4]この不況化の中でも本会活動に賛同し、運営を支えていただいているので、賛助会員の会費は、現行のまままで会費を一口/20,000円に据え置く。

4. その他

(1)2000年11月に発覚した旧石器時代遺跡・遺物

の捏造問題に関して、学会としてもこの問題について対応すべきとの昨年の大会時の提案に呼応して、2002年2月にシンポジウムをおこなった。さらに、本総会で、この問題に関連し、日本第四紀学会の会誌「第四紀研究」や本会関連の出版物に捏造関連資料がどのように使用されているかを点検する必要が提起された。幹事会で早急に対応する旨約束した。

2002年日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考結果報告

日本第四紀学会会長 熊井久雄 殿

2002年日本第四紀学会論文賞授賞候補者選考結果の報告

論文賞授賞候補者選考委員会
委員長 大場忠道

第四紀研究第39巻、第40巻の論文を対象に、独創性、論理性、発展性、学際性について慎重に審議した結果、次の2論文を授賞候補と決定しました。

佐藤慎一・東 幹夫・近藤 寛・西ノ首英之
「有明海諫早湾干拓地の貝類相 調整池における貝類相の時間的变化」。第四紀研究、第40巻2号、85-95頁、(2001)。

井上 弦・米山忠克・杉山真二・岡田英樹・長友由隆
「都城盆地の累積性黒ボク土における炭素・窒素安定同位体自然存在比の変遷 植物珪酸体による植生変遷との対応」。第四紀研究、40巻4号、307-318頁、(2001)。

同委員会委員：遠藤邦彦、斎藤文紀、松浦秀治、吉川周作、大場忠道

2001年度第9回幹事会議事録

日時：2002年7月24日(水)14:00～15:00
会場：早稲田大学教育学部16号館5階

出席：熊井久雄、真野勝友、小野 昭、鈴木毅彦、海津正倫、宮内崇裕、小田静夫、町田 洋、中川庸幸
欠席：山崎晴雄、竹村恵二、福澤仁之、河村善也

1. 報告事項

庶務、編集、行事、企画、広報、渉外：報告事項なし。会計：2001年度収支決算書の作成状況、露頭集・年代資料集の販売状況、2001年度会計監査の予定などについて。その他：2003年開催の第四紀学会大会(8月下旬大阪府で予定)に関して情報交換を行なった。INQUA招致の検討に関するワーキンググループからの検討状況。

2. 審議事項

- ・会費値上げに関する総会資料案とその内容検討。
- ・2002年度評議員会・総会の議事次第と資料の確認。
- ・北海道開拓記念館特別展「洞窟遺跡を残した続縄文の人々」(2002年9月13日～11月3日)を後援することとした。
- ・第四紀研究特集号の定価(通常号の倍額)を通常号と同一にすることについて審議し、次回幹事会で会計幹事からの提案として最終的な審議決定事項とすることにした。
- ・第四紀研究特集号の編集体制について、その時々状況に応じて、通常号編集幹事の裁量に任せることを確認した。
- ・学会ホームページを充実させるため、必要と思われる事項は広報幹事に伝えることとした。
- ・次回幹事会を2002年8月23日(金)12:40～13:40(会場：信州大学理学部C棟12番講義室)で開催することを確認した。

2002年度第1回幹事会議事録

日時：2002年8月23日(金)12:40～13:40

場所：信州大学理学部C棟12番講義室

出席：熊井久雄，真野勝友，小野 昭，鈴木毅彦，
河村善也，海津正倫，竹村恵二，小田静夫，宮内崇
裕，福澤仁之，町田 洋
欠席：山崎晴雄

報告事項

- ・2002年大会の進捗状況が報告された。
- ・自然史学会連合第8回シンポジウム「極域の生物学 フィールドサイエンスの最前線」(12月7日 国立科学博物館新宿分館講堂)の開催について。

審議事項

- ・2002年度総会資料と評議員会・総会の進行に関する確認を行った。
- ・第四紀通信上には商業誌の宣伝に繋がるような記事が掲載されないよう注意することとした。
- ・広報担当幹事が将来公務多忙になった場合の措置について。
- ・自然史学会連合ホームページ掲載用エッセイ寄稿者選定について。
- ・次回幹事会は，9月21日(土)10:30-12:00 早稲田大学教育学部で行うことになった。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀学会広報委員会 名古屋大学環境学研究科地理学講座

海津正倫 (e-mail: umitsu@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel : 052-789-2270

Fax : 052-789-2272

原則として奇数月月上旬原稿締切, 偶数月1日発行予定です.
(原稿・写真等は随時受け付けています.)

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/>

QR2home.htm で, 第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます.



資料（5） 2001年度業務委託費

（2001年8月1日～2002年7月31日）

・ 会員業務費用	2,523,810	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年9回)	1,756,480	(1,996件 × 880円)
3. 新入会員登録手数料	31,500	(45件 × 700円)
4. 住所変更手数料	125,400	(209件 × 600円)
5. 特別請求書発行手数料(団体会員)	120,000	(100件 × 1,200円)
(賛助会員)	34,000	(34件 × 1,000円)
6. 追加送付手数料(中途入会等)	75,500	(755件 × 100円)
7. 多部送付手数料	2,300	(5冊 × 460円)
8. 多点送付手数料(会報同封送)	54,630	(10,926件 × 5円)
9. 学会誌保管費用	144,000	(8段 × 18,000円)
・ 受付業務費用	320,000	
・ 会計業務費用	468,000	
消費税負担額 5%	165,590	
<hr/>		
合 計	3,477,400	

資料（6） 2002年度業務委託費見積

（2002年8月1日～2003年7月31日）

・ 会員業務費用	2,530,300	
1. 会員管理費	180,000	
2. 会費請求・学会誌等送付費用(年6回)	1,760,000	(2,000件 × 880円)
3. 新入会員登録手数料	35,000	(50件 × 700円)
4. 住所変更手数料	120,000	(200件 × 600円)
5. 特別請求書発行手数料(団体会員)	120,000	(100件 × 1,200円)
(賛助会員)	34,000	(34件 × 1,000円)
6. 追加送付手数料(中途入会等)	80,000	(800件 × 100円)
7. 多部送付手数料	2,300	(5冊 × 460円)
8. 多点送付手数料(会報同封送)	55,000	(11,000件 × 5円)
9. 学会誌保管費用	144,000	(8段 × 18,000円)
・ 受付業務費用	320,000	
・ 会計業務費用	468,000	
消費税負担額 5%	165,915	
<hr/>		
合 計	3,484,215	